様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１６４９

研究課題名（和文）グローバル化時代の子ども観の質的転換と子どもの権利保障政策に関する比較社会史研究

研究課題名（英文）Comparative Social History on the Qualitative Changes of the View of Childhood in the age of globalization and the guarantee of the Rights of the Child Policies

研究代表者
佐藤　哲也（Sato, Tetsuya）

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２７３８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,650,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、グローバル社会における子ども観の変容について、子どもの権利保障という視点から捉えつつ、日本、イギリス、ドイツ、フランス、旧ソ連圏における子どもの権利政策の歴史的展開を検討した。近代工業化社会では、子どもは労働力・資産、愛着の対象であった。しかし、人口減少に歯止めが掛からない高度情報化社会では、子どもを負債とみなすエートスが蔓延し、少子化に拍車を掛けていった。その一方で、ダイバーシティとウェルビーイングを求める人権意識の高揚と共に、子どもの発言権・社会参加権を擁護する新たな福祉政策が立案され、また人権の主体として社会に参画していくための教育実践が芽生え始めていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近代化を推進したヨーロッパとそれに追随した日本の児童福祉政策を比較検討することで、政策決定や展開の根底にある子ども観について検討した。各国の子ども政策の地域的・歴史的な特質と課題と共に、政策の実施を左右する子どもの生活実態を把握して、子ども福祉政策の歴史的展望について把握した。グローバリズムが進行し、ボーダーレス化、ダイバーシティが加速していく昨今にあって、子どもの「救済」「保護」「自立支援」政策をめぐり政策立案と展開、その評価に資する史的展望を拓くことができた。また、子ども自らが権利主体として参加していくための教育実践として、P4C（子どものための哲学）の可能性についても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examines the historical development of children's rights policies in Japan, the UK, Germany, France, and the former Soviet Union. We consider the changes in the view of children in global society from the perspective of protecting children's rights. In modern industrialized societies, children were valued the source of labor, assets, and an object of affection. However, in highly information-oriented societies where population decline is unstoppable, the ethos of viewing children as a liability has become widespread, accelerating the decline in the birthrate. On the other hand, it has been revealed that, along with the rise in human rights awareness calling for diversity and well-being, new welfare policies have been formulated to protect children's right to speak and participate in society, and educational practices are beginning to advocate of children's rights.

研究分野：教育学

キーワード：子ども観　親子関係　児童福祉　子どもの権利　教育史　子ども史　子どものための哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

国連子どもの権利条約の採択（1989年）・批准（1994年）の動きと並行して顕著となったグローバル化と消費至上主義によって、子どもの成長や発達に質的転換がもたらされている。こうした問題意識に基づいて、①5か国（日本、旧ソ連圏諸国、フランス、英国、米国）の子ども観を親・市民と国家・地域の各レベルで明らかにし、それらと子どもの権利との関係を理念と実態の両面から分析すること。②各国の子ども政策の地域的・歴史的な特質と課題を解明し、政策の実施を左右する子どもの生活実態を特徴づけること。③そのうえで、人口動態と家族構造、ジェンダー格差や貧困問題、教育制度を含め「救済」「保護」「自立支援教育」がボーダーレス化していく21世紀社会の歴史的展望を開きたいと考えた。

２．研究の目的

本研究における比較の着目点は、親・市民と国家・地域の子ども観と権利条約の関係である。また比較の基準は、子どもの権利条約の普遍原理である「差別禁止」「最善の利益」「生命・生存・発達」「意見表明」の保障と、「生存」「発達」「保護」「参加」「特に困難な状況下の子ども」という柱に括られる諸権利である。

本研究は、国内外の学界における学術的知見の構築に資するとともに、中央省庁から地方自治体に至る子ども政策の行政担当者の具体的な政策立案に供する視点を提供することを目的としている。

３．研究の方法

研究代表者と研究分担者が担当国についての文献調査を実施して（当初、現地調査を予定していたが、新型コロナウイルス感染症により、海外渡航がかなわなかった）、その結果を有機的に共有し、世界子ども学研究会研究例会や日本教育学会や教育史学会等の専門学会での研究報告、研究紀要や学術雑誌に投稿することで、研究成果を公表するとともに、課題をめぐる議論・研究を活性化させていく。そのための手だてとして、次の3つの柱を構成した。①5か国の子ども観を親・市民と国家・地域の各レベルで明らかにし、それらと子どもの権利保障との関係について、理念と実態の両面から分析する。②各国の子ども政策の地域的・歴史的な特質と課題を解明し、政策の実施を左右する子どもの生活実態を特徴づける。③そのうえで5か国の比較を、人口動態と家族構造、ジェンダー格差や貧困問題、さらには教育制度を含め、「救済」「保護」「自立支援教育」という福祉の3段階に目配りしながら、比較社会史的に進める。

４．研究成果

⑴　2019（令和元）年度　3回のミィーティング（5月25日、9月28日、12月21日：青山学院女子短期大学）と2回の研究会（5月25日：青山学院大学女子短期大学、9月28日：青山学院大学）を実施した。研究初年度に当たり、文献調査と研究発表・交流を中心に、活動を進めた。太田は子どもの意見表明権を具体化する試みのひとつとしてP4C（Philosophy for Children）に注目し、ドイツとアメリカ（初等教育における取り組みを参観するためにホノルルに渡航した）の実践の比較を試みた。佐藤も子どもの哲学を就学前に援用するための実践理論を検討するとともに、現代アメリカのキリスト・ファンダメンタリストの家族観や子育てに関する文献収集を行い、プロテスタント保守主義と子どもの権利との間の軋轢を探った。森本は「子どもの権利」概念の成立について、子ども研究の領域での動向把握と、エグランタイン・ジェブについての情報収集に取り組ん

だ。村知はカザフスタンの社会状況と子どもの権利をめぐる状況について調査を進め研究報告をまとめ、並河はイギリス初等教育における児童の自己決定権を多文化主義の文脈から研究した。井岡はフランスにおける子どもの権利条約と家族政策の展開状況、それと呼応する子どもや家族の生活実態について資料の収集と整理を行うとともに、保育絵本をめぐる母親役割についての歴史的考察に取り組んだ。稲井は「日本の子どもの権利思想の歴史と権利保障の現在」をテーマに、文献資料や映像資料の収集に努めた。これらの研究については、3月28日・29日に神戸女子大学・兵庫教育大学を会場に予定されていた第4回ミィーティングと研究会によって報告される予定であったが、新型コロナウィルス感染症拡大のため、文書による情報共有に留まった。

(2) 2020（令和2）年度は、本研究メンバーが集う世界こども学研究会例会（第25回・第26回）をオンラインで開催した。村知が「独立後のカザフスタン共和国の人口動態と子どもの権利(2)―乳幼児と保育をめぐる現状―」を、太田は「ヴァルケミューレ田園教育舎と〈ソクラテス方法〉」について報告を行った。村知の研究成果は『青山学院女子短期大学紀要』、太田のそれは玉川大学人文科学研究センター年報Humanitasや世界子ども学研究会紀要HALCYONを通じて公表された。

(3) 2021（令和3）年も、新型コロナウイルス感染症防止のための対策として、各研究分担者がオンラインで資料を探索したり文献資料を渉猟したりしながら、研究に取り組んだ。子どもの権利をめぐる各国の歴史的課題や現状を把握するために、子どもの虐待、子捨て（孤児）、福祉政策等を主題とした児童文学や小説等についても収集した。Emailを介して研究者間で情報交換を行うとともに、Zoomミーティングを実施して（8月と12月）、研究について共有した。また、北本正章氏（青山学院大学名誉教授）に研究への協力を依頼して、助言・研究情報の提供を受けた。世界こども学研究会例会（第27回・第28回）では、村知が「独立後アゼルバイジャンの人口動態と子どもの権利(2)―乳幼児と保育をめぐる現状―）を、太田が（ヴァルケミューレ田園教育舎と〈ソクラテス方法〉）を、それぞれ報告した。並河・森本は同研究会の特別企画「シンデレラ譚シンポジウム」でコメンテーターを務めた。

(4) 2022（令和4）年も世界子ども学研究会を軸として研究活動を展開した。第29回研究例会（9月17日）では、村知が「独立後のアゼルバイジャン共和国の人口動態と子どもの権利(3)」を、森本と並河が「近現代イギリスにおける〈親子分離〉」を、第30回研究例会（3月18日）では、太田が「〈子どものため哲学〉とソクラテス的校　〈子どものため哲学〉とソクラテス的校―ヴァルケミューレ、メフンゲオストプガド―」について報告を行い、研究成果の公開が図られた。日本教育学会第81回大会（8月24日）ラウンドテーブル（RT12）では「子どもの権利を比較（史）的に考える　―現代の日本、フランス、旧ソ連諸国と中世ドイツからの問題提起―」を実施した。研究分担者の村知が「旧ソ連諸国における子どもの権利条約に関する政府報告書と総括所見の県警」と稲井が「孤児を描いた比江島重孝による子ども文学の意義」を報告、また研究協力者の伊藤敬佑（白百合女子大学非常勤）が「フランスの子どもの本は子どもの権利をどのように(幼い)子どもに語るのか?　―アラン・セール(リュ・デュ・モンド社)が手がけた作品を中心に―」を、鈴木明日見（駒澤大学非常勤）が「中世ドイツにおける子どもの権利―ゲルマン諸部族法典からの分析―」を報告して、グローバル・ヒストリーの観点から研究討議を展開した。また、研究代表者の佐藤は日本キリスト教教育学会第34回大会シンポジウム「キリスト教教育のアクチュアリティー　―子ども受難の時代に立ち向かうために」のシンポジストとして登壇して、テーマに沿った研究報告と問題提起とを行った。村知は、幼児教育史学会第18回大会シンポジウムにおいて「グローバル化と保育をめぐる諸問題」と題した招待講演を担当した。

(5) 2023年度は研究期間の延長による本研究最終年度となった。少子化のみならず人口減少のグローバル化が懸念されている昨今、各国・地域の子どもの権利保障の政策展開の動向を視野に入れつ

つ、少子家族の子ども観と権利保障の歴史的展開、子ども政策の実現条件としての家族構造、ジェンダー・バランス、子どもの生活実態についてのとりまとめを試みた。現代社会で形成された子どもの権利思想の背後にある西欧近代社会の子ども観、他地域での受容の実態、子ども観の受容と変化の力学を生む文化・宗教・社会・経済・政治などの諸要因等について、今後の研究に繋がる知見を探った。

近代家族と近代的子ども観が敷衍した19世紀を対象とした研究として、イギリスの親子隔離政策（森本、並河）、フランスの礼儀作法書や子ども期をモチーフとした小説に描かれた子どもの権利概念（井岡）、現代日本における子どもの権利保障の現状と課題（稲井）、旧ソ連４ヶ国（カザフスタン、アゼルバイジャン、ベラルーシ、アルメニア）の子ども政策に関する比較研究（村知）などの成果を収めた。また、子どもの意見表明権を保障するための実践的取組として、「哲学対話」やP4C（Philosophy for Children）に関する思想史的研究（太田）、ハワイ型p4c(philosophy for children)を日本に導入する試みについて佐藤が、それぞれ研究発表を行い、比較教育実践史の視点からの考察を試みた。

研究成果の公表については、世界子ども学研究会研究例会（第31回：東京池袋、第32回：東京白金）や日本教育学会第82回大会（ラウンドテーブル：オンライン開催）、幼児教育史学会第19回大会（シンポジウム：青山学院大学）等、研究会や学会活動を軸として、研究発表を行った。また、世界子ども学研究会紀要HALCYON NO.11 には、村知、森本、太田の研究論文をはじめ、研究協力者の北本の論考も寄せられた。その他、研究分担者が所属する大学研究紀要や学会紀要、書籍等を通じて本研究の成果が論文としてまとめられ、公表がなされている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計29件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　12件）

１．著者名 村知　稔三	４．巻 18
２．論文標題 グローバル化と保育をめぐる諸問題	５．発行年 2023年
３．雑誌名 幼児教育史研究	６．最初と最後の頁 55～68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村知　稔三	４．巻 15
２．論文標題 旧ソ連4か国における子どもの権利条約の国内実施に関する動向とその特徴(1) 子どもの権利法の比較を中心	５．発行年 2024年
３．雑誌名 青山学院大学教育人間科学部紀要	６．最初と最後の頁 37～58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村知　稔三	４．巻 11
２．論文標題 <図書紹介>原田綾子『子どもの意見表明権の保障 家事司法システムにおける子どもの権利』	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ハルシオン（世界子ども学研究会）	６．最初と最後の頁 70～74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村知　稔三	４．巻 11
２．論文標題 <図書紹介>原俊彦『サピエンス減少 縮減する未来の課題を探る』	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ハルシオン（世界子ども学研究会）	６．最初と最後の頁 75～81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森本　真実	4．巻 21
2．論文標題 19世紀イギリスの少年感化施設と〈親子離隔〉	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ヴィクトリア朝研究（日本ヴィクトリア朝文化研究学会）	6．最初と最後の頁 98～108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森本 真美	4．巻 66
2．論文標題 北本正章 著 『子ども観と教育の歴史図像学―新しい子ども学の基礎理論のために』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本の教育史学（教育史学会）	6．最初と最後の頁 180～182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15062/kyouikushigaku.66.0_180	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井岡　瑞日	4．巻 11
2．論文標題 月刊保育絵本『ひかりのくに』における編集長・豊田次雄の果たした役割	5．発行年 2024年
3．雑誌名 ハルシオン（世界子ども学研究会）	6．最初と最後の頁 31～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井岡　瑞日	4．巻 112024
2．論文標題 ［書評］稲井智義『子ども福祉施設と教育思想の社会史 石井十次から富田象吉、高田慎吾へ』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ハルシオン（世界子ども学研究会）	6．最初と最後の頁 57~60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 稲井　智義	4．巻 63
2．論文標題 労働組合と教育からアナーカ・フェミニズムへ	5．発行年 2023年
3．雑誌名 社会事業史研究（社会事業史学会）	6．最初と最後の頁 85~91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 太田　明	4．巻 11
2．論文標題 「子どもの哲学」と「大人の哲学」	5．発行年 2024年
3．雑誌名 ハルシオン（世界子ども学研究会）	6．最初と最後の頁 43~56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤　哲也	4．巻 31
2．論文標題 キリスト教教育のアクチュアリティー 子ども受難の時代に立ち向かうために	5．発行年 2023年
3．雑誌名 キリスト教教育論集	6．最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲井　智義	4．巻 21
2．論文標題 子ども福祉施設とアナーキズムの接点	5．発行年 2022年
3．雑誌名 中国四国社会福祉史研究	6．最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲井　智義	4．巻 23
2．論文標題 岡山孤児院の裁縫教育と幼児教育の担い手	5．発行年 2022年
3．雑誌名 石井十次資料館研究紀要	6．最初と最後の頁 184-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲井　智義	4．巻 7
2．論文標題 『「保育の質」を超えて』を読む	5．発行年 2023年
3．雑誌名 社会保育実践研究	6．最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村知　稔三	4．巻 18
2．論文標題 ロシアの保育史と旧ソ連4か国の子ども学に関する研究の省察	5．発行年 2023年
3．雑誌名 青山スタンダード論集	6．最初と最後の頁 135-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/22621	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村知　稔三	4．巻 14
2．論文標題 アゼルバイジャン子ども学研究序説(2) ―乳幼児と保育をめぐる現状―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 青山学院大学教育人間科学部紀要	6．最初と最後の頁 59-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/22757	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村知　稔三	4．巻 67
2．論文標題 アゼルバイジャン子ども学研究序説(3) ―子どもの権利条約の国内実施に関する立法化と政策を中心に―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 (青山学院大学教育学会)教育研究	6．最初と最後の頁 67-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤　哲也	4．巻 58
2．論文標題 子ども主体言説：子どもの存在意義を問う	5．発行年 2020年
3．雑誌名 保育学研究	6．最初と最後の頁 254-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤　哲也	4．巻 63
2．論文標題 土屋敦・野々村淑子編著『孤児と救済のエポック―十六―二〇世紀にみる子ども・家族規範の多相性』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本の教育史学	6．最初と最後の頁 195-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村知　稔三	4．巻 74
2．論文標題 カザフスタン子ども学研究序説(2)独立後のカザフスタン共和国の人口動態と子どもの権利(2)―乳幼児と保育をめぐる現状―乳幼児と保育をめぐる現状独立後のカザフスタン共和国の人口動態と子どもの権利(2)―乳幼児と保育をめぐる現状―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 青山学院女子短期大学紀要	6．最初と最後の頁 19-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村知　稔三	4．巻 8
2．論文標題 カザフスタン子ども学研究序説(3)ー子どもの権利条約に関する政府報告書と総括所見の関係独立後のカザフスタン共和国の人口動態と子どもの権利(2)ー乳幼児と保育をめぐる現状ー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 世界子ども学研究会紀要ハルシオン	6．最初と最後の頁 11-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井岡　瑞日	4．巻 27
2．論文標題 保育絵本に対する母親の働きかけについての歴史的考察ー1960年代の『ひかりのくに』別冊付録を手がかりとしてー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 子ども社会研究	6．最初と最後の頁 185-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 稲井　智義	4．巻 21
2．論文標題 佐々栄（冨田栄子）の履歴書	5．発行年 2020年
3．雑誌名 石井十次資料館研究紀要	6．最初と最後の頁 207-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲井　智義	4．巻 15
2．論文標題 大石茜著『近代家族の誕生――女性による慈善事業の先駆、「二葉幼稚園」』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 幼児教育史研究	6．最初と最後の頁 93-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村知　稔三	4．巻 73
2．論文標題 カザフスタン子ども学研究序説(1)――概要と人口動態――	5．発行年 2019年
3．雑誌名 青山学院女子短期大学紀要	6．最初と最後の頁 109-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田　明	4．巻 第 11 号
2．論文標題 ソクラテス的対話から見た子どもの哲学	5．発行年 2020年
3．雑誌名 玉川大学人文科学研究センター年報 Humanitas	6．最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 並河　葉子	4．巻 826号
2．論文標題 自分で決めること～多文化社会イギリスの小学校教育のかたち～	5．発行年 2019年
3．雑誌名 兵庫教育	6．最初と最後の頁 32－33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤　哲也	4．巻 613号
2．論文標題 幼稚園教育要領の改訂とキリスト教保育（１）　-教育をめぐるパラダイム転換に着目して-	5．発行年 2020年
3．雑誌名 キリスト教保育	6．最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤　哲也	４．巻 614号
２．論文標題 幼稚園教育要領改訂とキリスト教保育（２）　－「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をめぐって －	５．発行年 2020年
３．雑誌名 キリスト教保育	６．最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 佐藤　哲也
２．発表標題 キリスト教育のアクチュアリティー 子ども受難の時代に立ち向かうために
３．学会等名 日本キリスト教教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 村知　稔三
２．発表標題 独立後のアゼルバイジャン共和国人口動態と子ども権利 独立後のアゼルバイジャン共和国人口動態と子ども権利（3）―子どもの権利実態とそ保護動向 ―
３．学会等名 世界子ども学研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 村知　稔三
２．発表標題 グローバル化と保育をめぐる諸問題
３．学会等名 幼児教育史学会第18回大会シンポジウム(招待講演
４．発表年 2022年

１．発表者名 森本　真美、並河　葉子、奥田　伸子
２．発表標題 近現代イギリスにおける〈親子分離〉
３．学会等名 世界子ども学研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 並河　葉子、森本　真美、奥田　伸子、川津　雅江
２．発表標題 奴隷制と家族――シエラレオネと西インドの事例から―
３．学会等名 ヴィクトリア朝文化研究学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森本　真実
２．発表標題 周縁からのフェミニズムの再検討―イギリス女性たちに見るOur Storyとour storiesのはざま』第二報告「19世紀イギリスの子ども支援チャリティと女性たち」
３．学会等名 日本西洋史学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森本　真美
２．発表標題 世界の子ども イギリス篇へのコメント
３．学会等名 子どもの世界史
４．発表年 2022年

１．発表者名 井岡　瑞日
２．発表標題 礼儀作法書における子どもの権利論萌芽 礼儀作法書における子どもの権利論萌芽 ―モンヴェル 『子どものため正しい作法』とそ歴史的背景 から考える
３．学会等名 世界子ども学研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 村知　稔三
２．発表標題 独立後のカザフスタン共和国の人口動態と子どもの権利(2)―乳幼児と保育をめぐる現状―
３．学会等名 世界子ども学研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 太田　明
２．発表標題 ヴァルケミューレ田園教育者と〈ソクラテス的方法〉
３．学会等名 世界子ども学研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 村知　稔三
２．発表標題 独立後のカザフスタン共和国の人口動態と子どもの権利(1)
３．学会等名 世界子ども学　第24回研究例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 太田　明
２．発表標題 ソクラテス的対話から見た「子どもの哲学」
３．学会等名 世界子ども学　第24回研究例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 井岡　瑞日
２．発表標題 保育絵本をめぐる母役割についての歴史的考察―1960年代の「ひかりのくに」を中心に
３．学会等名 日本保育学会 第72回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 稲井　智義	４．発行年 2022年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 272
３．書名 子ども福祉施設と教育思想の社会史――石井十次から冨田象吉、高田慎吾へ	

１．著者名 村知　稔三	４．発行年 2022年
２．出版社 幼児教育史学会監修	５．総ページ数 389
３．書名 幼児教育史研究の新地平 下巻 幼児教育の現代史>(執筆：第10章「体制転換後のロシア、ベラルーシ、カザフスタンの社会と保育」pp.304-326／「第3部について」pp.272-273	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	村知　稔三 (MURACH Toshimi) (00190926)	青山学院大学・教育人間科学部・客員教授 (32601)	2023年度以降：明治学院大学、国際平和研究所、研究員 2022年度 青山学院大学：教育人間科学部、客員教授 2021年度 青山学院大学：教育人間科学部、教授
研究分担者	中沢　葉子（並河葉子） (NAKAZAWA Yoko) (10295743)	神戸市外国語大学・外国語学部・教授 (24501)	
研究分担者	井岡　瑞日 (IOKA Mizuhi) (20836449)	大阪総合保育大学・児童保育学部・准教授 (34445)	
研究分担者	太田　明 (OHTA Akira) (30261001)	玉川大学・学術研究所・研究員 (32639)	
研究分担者	稲井　智義 (INAI Tomoyoshi) (30755244)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	
研究分担者	吉村　真美（森本真美） (YOSIMURA Mami) (80263177)	神戸女子大学・文学部・教授 (34511)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関